

試験研究成果普及情報

部門	稲	対象	普及
課題名：大粒で外観品質の良好な「ふさのもち」を早期に収穫するための栽培技術			
<p>[要約]「ふさのもち」を4月上旬に移植し、基肥窒素施用量を標準量よりやや少ない4kg/10aとし（壤質土の場合）、穂肥窒素を出穂期前10日に施用して㎡当たり籾数の過剰を抑制することで、粒厚2.0mmで選別しても600kg/10a程度の収量を確保でき、大粒で外観品質の良好な玄米を8月20日前後に収穫できる。</p>			
フリーワード	水稻、糯品種、収穫時期、品質、穂肥		
実施機関名	主 査 農林総合研究センター 水稻・畑地園芸研究所 水稻温暖化対策研究室 協力機関 生産振興課		
実施期間	2012年度～2014年度		

[目的及び背景]

本県が育成した糯品種「ふさのもち」は、高品質で栽培特性に優れる。餅質が良好である他、大粒で高品質という特性を活かして赤飯等の米加工品にも向く。この優れた特性を維持しつつ、収穫時期の作業の競合を避けるために「コシヒカリ」より早い時期に収穫できる栽培技術を確立する。

[成果内容]

- 1 葉令約2.2の稚苗を4月18日頃に移植した場合の成熟期は、同時期に移植した「コシヒカリ」並みである。移植を4月上旬まで早めると、4月20日に移植した「コシヒカリ」より早い8月20日前後に収穫することができる（図1）。
- 2 ㎡当たり籾数33,000粒程度までは籾数の増加に伴って粒厚2.0mmで選別した精玄米重は増加する（図2）。しかし、㎡当たり籾数が30,000粒程度を上回ると粒厚歩留りや玄米外観品質が低下する（図3）。また、㎡当たり籾数が多いと登熟日数（出穂期から成熟期の日数）が長くなり、収穫時期が遅れ、早期に移植した効果が打ち消される（図4）。㎡当たり籾数を4月20日頃の移植と同様に28,000～30,000粒とすることで、粒厚2.0mmで選別した大粒の玄米を600kg/10a程度得ることができ、登熟日数は34～35日となり早期に収穫できる。
- 3 基肥窒素施用量は4月20日頃に移植する場合の標準量である6kg/10aより少ない4kg/10a程度とする（壤質土の場合）。穂肥窒素施用時期が早いと㎡当たり籾数が多くなるため、穂肥は出穂期前10日（幼穂形成期から約15日後、幼穂長7～11cm）に施用することで目標とする㎡当たり籾数を得ることができる（図5）。

[留意事項]

- 1 4月上旬に稚苗を移植するためには育苗期間をやや長めに設定する。播種に当たり、低温期の浸種となることから、水温を10~20℃に保つようにする。
- 2 収量・品質の安定のため、栽植密度は18.5株/m²（坪当たり60株）とする。
- 3 移植時期が移植早限より早いことから、幼穂形成期以降に日平均気温が20℃を下回る低温になった時には障害型冷害を回避するために深水管理による保温に努める。
- 4 幼穂形成期の適正な生育量は4月20日頃の移植と同様である（平成20年度を参照）。

[普及対象地域]

県内全域

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

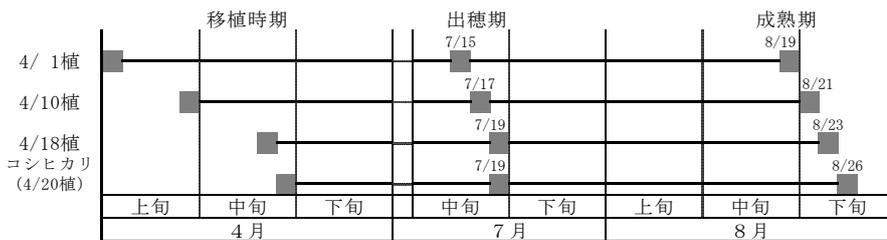


図1 「ふさのもち」の移植時期と出穂期及び成熟期との関係

注) 出穂期は平成24~26年の基肥窒素施用量4kg/10a、穂肥窒素3kg/10aを出穂期前10日に施用した試験区の実測値の平均値を示し、成熟期はその35日後とした（コシヒカ리는38日後）。

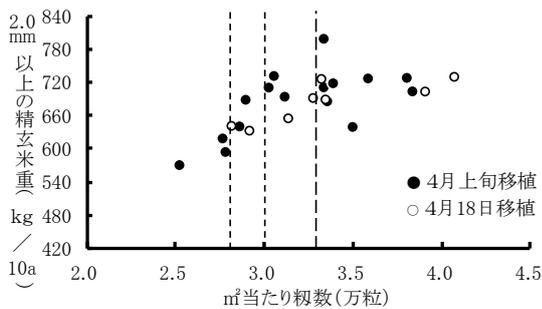


図2 「ふさのもち」のm²当たり粒数と粒厚2.0mmで選別した精玄米重との関係(平成25、26年)

注) 移植時期は4/1、4/10、4/18、基肥窒素施用量は4または6kg/10a、穂肥窒素施用時期は出穂期前18日または10日。

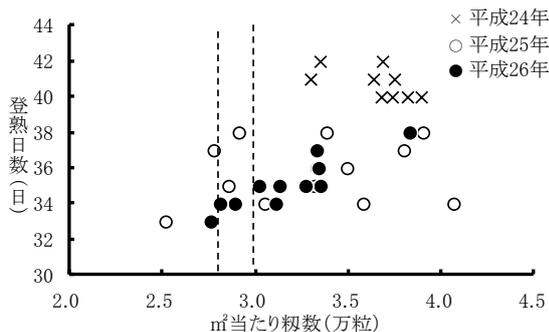


図4 「ふさのもち」のm²当たり粒数と登熟日数(出穂期~成熟期)との関係

注) 栽培条件は図2と同じ。

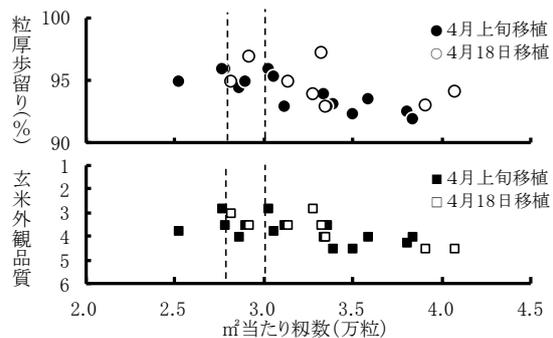


図3 「ふさのもち」のm²当たり粒数と粒厚2.0mm以上の粒厚歩留り(上図)及び玄米外観品質(下図)との関係(平成25、26年)
注) 栽培条件は図2と同じ。

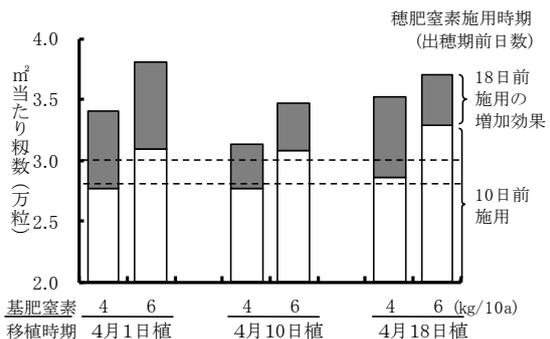


図5 「ふさのもち」の移植時期、基肥窒素施用量及び穂肥窒素施用時期とm²当たり粒数との関係(平成25、26年の平均値)。

[発表及び関連文献]

平成 27 年度試験研究成果発表会（作物部門）

[その他]

平成 23 年度試験研究要望課題（提起機関：生産販売振興課）